

2017

第70回東北地区歯科医学会
プログラム

会 期／平成29年11月11日（土） 14時00分～18時10分
 平成29年11月12日（日） 09時00分～13時05分
会 場／福島県歯科医師会館 2階 大会議室
 福島市仲間町6番6号 TEL 024-523-3266

主催 東北地区歯科医師会連合会



ごあいさつ

東北地区歯科医師会連合会

当番県 福島県歯科医師会

会 長 海 野 仁

第70回東北地区歯科医学会学術大会を開催するにあたり、当番県として一言ご挨拶申し上げます。

遡ること7年前、平成23年第64回大会は福島県が当番となり開催される予定でしたが、東日本大震災の影響が甚大であったために中止となりました。大会の回数表示についてですが、開催されなかった大会であったにもかかわらず、中止された大会として付番し、東日本大震災が発災した年であることが後年に亘って記録に残るよう配慮いただいた事を感謝しております。そして今年、平成16年以来13年ぶりに福島県において大会を開催できることを嬉しく思うとともに、大変に光栄に感じています。

東日本大震災に伴って、福島県においては東京電力福島第一原子力発電所の事故が起こり、多量の放射線が放出されました。その影響は直接的なもの、風評などの間接的なものを合わせて福島県民の生活において非常に大きなものとなりましたが、皆様のご理解のもと少しずつ復興を進めています。この放射線の人体への影響ですが、以前から大気中核実験後には乳歯中のストロンチウム90が増加し、被爆量の推定に資する可能性があることは明らかにされていきました。福島県歯科医師会では原発事故後、歯牙中の放射線量を測定し記録することが後世への責務と考え、東北大学大学院歯学研究科、奥羽大学歯学部と協定し調査を進めています。

そこで今大会では東北大学大学院歯学研究科科長・歯学部長の佐々木啓一先生をお招きし、『歯を用いた被爆線量評価』の演題でご講演いただくことに致しました。分析技術の進捗、他同県との線量比較など興味深いお話をいただけるものと思います。

一般口演は、他の学会誌に遜色ないものにすべく多年に亘り尽力いただいた学術委員と奥羽大学歯学部、岩手医科大学歯学部、東北大学大学院歯学研究科のお力によって、査読希望の口演が多くなっています。一方で、日々の診療で感じたことや経験したことを学会の形式にとらわれずに自由に発表できることも、長い歴史に培われた本大会の重要な役割と考えています。会員の皆様には本学会の担う役割を十分にご理解いただき、おおらかで活気のある学術交流をお願いいたします。

開催にあたり、関係各位の多大なご協力、ご支援に感謝申し上げますと共に多数のご参加をお願いし、実り多い学術大会となりますよう祈念します。



祝 辞

公益社団法人 日本歯科医師会

会 長 堀 憲 郎

このたび第70回東北地区歯科医学会が盛大に開催されますことに心よりお祝い申し上げますとともに、当番県としてご尽力された福島県歯科医師会 海野会長を始め役員の方々に深甚なる敬意を表します。

またご出席の会員の先生方には、平素より本会の会務に多大なるご支援を賜っておりますことに厚く御礼を申し上げます。

さて、約15年前の歯科界は、歯科医療費を減らし続ける厳しい時代がありました。そこから、歯科界は一丸となって超高齢社会における新しい歯科医療の姿を模索し「長寿社会では長く生きることだけを目標にせず、『食べる』『話す』『笑う』という生活の基本的機能を人生の最後まで全うすることを目指すべきである。そしてそこに歯科医療の、新しい責任と役割を見いだす」との明確な目標を得るに至り、歯科医療、口腔健康管理の有用性についてエビデンスを示しつつ発信を続けました。

そのことにより、近年漸く歯科医療への国民の理解が得られ、国の様々な重要な審議会でも歯科医療に期待する発言が相次ぎ、また例えば特定健診の質問事項、病床機能報告に初めて歯科項目が入り、働き方ビジョン検討会報告、さらには骨太の方針にも「生涯を通じた歯科健診の充実、入院患者や要介護者に対する口腔機能管理の推進など歯科保健医療の充実に取り組む」と明記されました。

今そのような歯科医療に対して寄せられている期待に応え、培ってきた具体的な歯科医療政策を、適切に展開する責任が歯科界には課せられています。しっかりと地に足をつけ、日歯を中心に、日歯連盟、日歯医学会をはじめ、産業界、関係団体を含めて、臨産学官一体となって、オールデンタルで国民への責任を果たしていきたいと決意を新たにしています。

今回は、第70回という記念すべき大会でもあり、先生方の長年に亘る自己研鑽への真摯な姿勢を誇りとして感じるとともに、本歯科医学会が実りある会になることをご期待申し上げますとともに、会員の先生方、関係各位のご健勝をご祈念申し上げ祝辞といたします。



第70回東北地区歯科医学会に寄せて

日本歯科医学会

会 長 住 友 雅 人

第70回東北地区歯科医学会が福島県歯科医師会の当番で開催されること心からお慶び申し上げます。

毎回、プログラムでのご挨拶になりますが、お送りいただくプログラムの内容から、東北地区の学術に対する意識の高さに感心しています。この地区歯科医学会での学びは、とりもなおさず東北地区の住民に高い質の歯科医療提供がなされていることを意味していると推察しています。

日本歯科医学会の事業で力を入れているのは日本歯科医師会会員への学術的支援です。その最も大きな事業は日本歯科医学会総会です。昨年秋には福岡市において第23回の学術大会を開催しました。主幹校は福岡歯科大学でしたが、初めての九州開催ということで、九州地区の4つの歯科大学・歯学部を幹事校とし、加えて8つの県歯科医師会のご協力で行いました。コンパクトながら力強い総会となりました。

長年行ってきた総会会頭を大学にお願いするのは第23回で終わりにし、第24回からは規程で示されているように、会頭には学会会長になります。これによって実行委員などは各分科会からと、開催地の所属する地区歯科医師会のブロックから選出されることになるでしょう。第24回大会は2021年9月23日、24、25日の3日間、パシフィコ横浜を会場にして開催されますので、関東・東京ブロックの歯科医師会の全面的協力を求めることになるでしょうか。分科会と地区歯科医師会が総会に積極的に関わることから、これまで以上に多くの方々が参加されることを期待しています。

第25回以降の開催地は決まっていますが、全国の各地区ブロックが中心になって、分科会と協働しての開催も視野に入れることができます。第24回の総会のあり方について学会内に設置した協議会でこれから検討が始まります。今後の総会がより有意義なものとなるような議論を行っていくつもりです。

何はともあれ日本歯科医学会は、多くの新しい情報に接する機会を設けます。日本歯科医師会のすべての会員は日本歯科医学会会員でもあります。学会事業にも積極的に関わってください。

学会運営上のご連絡

◆ 会員の皆様へ

- (1) プログラムは当日ご持参ください。
- (2) 会員入場の際はネームカードをお付けください。ネームカードは受付に準備してあります。
- (3) 質問者は質問用マイクで自己の所属と氏名を述べてからご発言ください。
- (4) 日歯生涯研修事業ICカードを当日ご持参ください。

◆ 口演者の皆様へ

- (1) 口演時間8分、質疑応答時間2分を厳守してください。口演時間終了1分前(7分)にチャイムを1回、口演終了時刻(8分)に2回、質疑応答終了時間(10分)に2回でお知らせいたしますので、時間厳守をお願いします。
- (2) 次演者は口演開始10分前までに次演者席にご着席ください。
- (3) 「みちのく歯學會雑誌」掲載用論文、事後抄録を11月20日(月)までに、東北地区歯科医師会会員は所属県歯科医師会編集査読委員、その他の会員(大学関係者等)は当番県歯科医師会に提出してください。先に送付しております「みちのく歯學會雑誌投稿規程」をご一読の上、CD-Rまたはメール添付(MS Word、テキスト形式)とそれを印刷したものの両方をセットでご提出をお願いいたします。

◆ 座長の皆様へ

- (1) 発表進行は座長にご一任いたしますので、時間厳守でよろしくお願い申し上げます。
- (2) ご担当時刻の10分前までに次座長席にご着席ください。

◆ 学会係員は胸に表示をつけていますので、ご不明な点はお申し出ください。

◆ 懇親会

第1日目終了後、下記の要領で懇親会を開催いたします。
多数の皆様のご参加をお待ちいたしております。

日時：平成29年11月11日(土) 午後6時40分

場所：SP VILLAS サンパレス福島

福島市上町4番30号 TEL：024-523-3811

学 会 日 程

11月11日 (土)	
13:00	開場・受付開始
14:00	開会行事
14:30	特別講演 演 題：「歯を用いた被ばく線量評価 —福島県歯科医師会とともに—」 講 師：東北大学大学院歯学研究科 科長・歯学部長 佐々木 啓 一 先生 座 長：福島県歯科医師会理事 中 村 文 彦
16:05	【一般口演】 I 群 (6 題)
17:10	【一般口演】 II 群 (6 題)
18:10	閉 会
18:40	懇 親 会 (SP VILLAS サンパレス福島)
11月12日 (日)	
08:30	開場・受付開始
08:55	開 会
09:00	【一般口演】 III 群 (6 題)
10:05	【一般口演】 IV 群 (6 題)
11:10	【一般口演】 V 群 (5 題)
12:05	【一般口演】 VI 群 (6 題)
13:05	閉 会

(昼食は準備しておりませんので、各自ご対応をお願いいたします。)

開 会 行 事

日 時 平成29年11月11日(土)午後2時～午後2時30分
場 所 福島県歯科医師会館 2階 大会議室

司会：福島県歯科医師会 理事 中 村 文 彦

1. 開 会 福島県歯科医師会 副会長 柳 田 教 夫

2. 挨 拶 東北地区歯科医師会連合会会長
福島県歯科医師会会長 海 野 仁
奥羽大学歯学部長 大 野 敬

3. 祝 辞 日本歯科医師会会長 堀 憲 郎

4. 来賓紹介 福島県歯科医師会 理事 中 村 文 彦

5. 第70回大会表彰

奥 羽 大 学 齋 藤 高 弘

秋田県歯科医師会 守 口 修

福島県歯科医師会 石 川 伸 一

6. 閉 会 福島県歯科医師会 副会長 柳 田 教 夫

特別講演抄録



歯を用いた被ばく線量評価

— 福島県歯科医師会とともに —

東北大学大学院歯学研究科

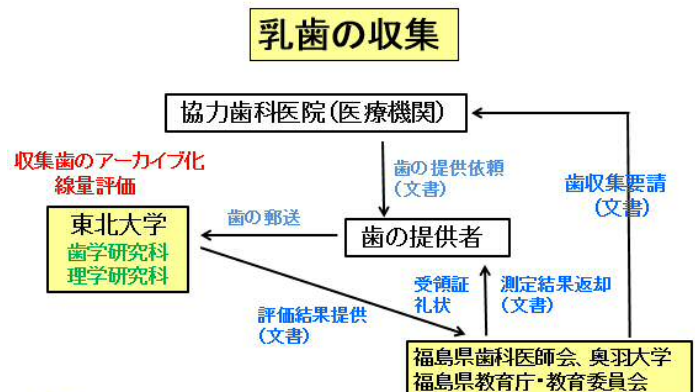
科長・歯学部長 佐々木 啓 一

体内に入った放射性ストロンチウムやセシウムは、歯の形成期に歯質中に取り込まれ、そのまま歯質中に保持されます。したがって歯に取り込まれた放射性物質の濃度は、歯が形成される時期の内部被ばく状況を忠実に反映しているものと考えられます。また放射線被ばくにより、被ばく量に比例して歯質中には炭酸ラジカルが発生し、そのラジカルも半永久的に歯質中に保持されます。したがって、そのラジカル量を測定することによって、歯から外部被ばく量を推定できる可能性もあります。

そこで私ども東北大学は、福島県歯科医師会、奥羽大学と共同で、これら歯の持つ非代謝性・記録性に着目し、脱落した乳歯歯質中の放射性物質やラジカルを測定することにより、歯から個体の被ばく歴や被ばく量を把握する事業を開始しました。その最終目的は、原子力発電所災害による放射線の人体への影響を評価するための基礎資料を提供することにあります。幸いにも環境省「放射線の健康影響に係る研究調査事業」に平成25年度から採択され、国の認める事業として遂行しています。

これまで福島県を中心に全国各地より6,000本を超える乳歯を収集し、バンク化しています。昨年度までに収集した乳歯はいずれも福島第一原発事故が発生する以前に形成された乳歯であり、自然環境下での被ばく量のコントロールとなります。実際の事故の影響は、今年度以降収集される乳歯（原発事故以降の環境下で形成された歯）で明らかになります。

今回の講演では、事業ならびに線量評価法の概要についてお話をしたいと思います。



平成26年1月20日より歯の収集を開始

佐々木 啓 一 (ささき けいいち)

東北大学大学院歯学研究科 科長・歯学部長

昭和31年9月24日生

【略 歴】

1981年3月	東北大学歯学部 卒業
1985年3月	東北大学大学院歯学研究科 修了
1985年4月	東北大学 助手(歯学部) 採用
1987年9月 ～1989年3月	University of British Columbia・Visiting Researcher(客員研究員)
2000年2月	東北大学 教授(歯学部) 昇任
2000年4月	東北大学大学院 教授(歯学研究科)
2009年2月 ～2010年3月	東北大学病院総括副病院長・附属歯科医療センター長
2010年4月	東北大学大学院歯学研究科長・歯学部長 現在に至る

【専門分野】

補綴歯科、歯科インプラント、顎口腔機能、口腔顔面痛、顎関節症

【主な学会活動】

2017年9月現在	(一社)日本口腔顔面痛学会 理事長 (一社)日本顎関節学会理事 (一社)日本顎顔面補綴学会 理事 日本顎口腔機能学会 理事 (NPO 法人)日本咀嚼学会 理事
2009年4月 ～2011年3月	(社)日本補綴歯科学会理事長
2014年7月 ～2016年6月	(一社)日本歯学系学会協議会 副理事長
2012年4月 ～2014年3月	日本顎口腔機能学会 会長
2011年4月 ～2012年3月	国際歯科研究会(IADR) Prosthodontic Group 会長
2008年9月 ～2010年8月	Asian Academy of Craniomandibular Disorders 会長

4 地域歯科医師会による岩手県立中部病院入院患者の口腔内一斉調査 ～H22年度とH28年度の比較～

○高橋 綾¹⁾ 前川 洋¹⁾ 齊藤 英朗¹⁾ 昆 隆一¹⁾
前田 誠一郎¹⁾ 三浦 康弘¹⁾ 米持 武美¹⁾ 加藤 秀昭¹⁾
鳥谷 恭右¹⁾ 佐藤 保¹⁾ 遠藤 秀彦²⁾ 曾根 克明²⁾
北村 道彦³⁾

一般社団法人 岩手県歯科医師会 口腔保健センター事業運営委員会¹⁾

岩手県立中部病院²⁾ 町立西和賀さわうち病院³⁾

5 当科における周術期口腔機能管理対象者の口腔状態

○山森 郁 吉岡 千穂 北畠 健一朗 飯野 光喜

山形大学医学部 歯科口腔・形成外科学講座

6 メカブと歯周炎

○大島 光宏¹⁾ 山口 洋子²⁾

奥羽大学薬学部¹⁾ 日本大学歯学部²⁾

II 群

17:10～18:10

座長 岩手県歯科医師会理事 鈴木 卓哉

7 当県における75歳歯科健診事業の報告

○山崎 猛男²⁾ 根本 充康¹⁾ 鈴木 宏明¹⁾ 戸田 慎治¹⁾
佐藤 文彦¹⁾ 佐々木 隆二¹⁾ 森 拓也¹⁾ 齋 基之²⁾
相澤 俊彦²⁾ 前川 理人²⁾ 川村 洋²⁾ 河瀬 聡一朗²⁾
細谷 仁憲

一般社団法人 宮城県歯科医師会 地域保健部会¹⁾

一般社団法人 宮城県歯科医師会 在宅歯科部会²⁾

8 仮設住宅入居者に対する口腔ケア推進事業の4年間の総括

○瀬川 洋¹⁾ 大橋 明石¹⁾ 板橋 仁²⁾ 高田 訓³⁾
池山 丈二⁴⁾ 金子 振⁴⁾ 海野 仁⁴⁾

奥羽大学歯学部 口腔衛生学講座¹⁾ 奥羽大学歯学部 成長発育歯学講座 歯科矯正学分野²⁾

奥羽大学歯学部 口腔外科学講座³⁾ 公益社団法人 福島県歯科医師会⁴⁾

9 地域で“食べる”を支えるために

～食べる輪の活動とアンケート調査から多職種連携を考える～

○山本 寿則^{1, 2)} 河瀬 聡一朗^{1, 3)}

石巻圏摂食・嚥下研究会¹⁾ ことぶき歯科²⁾ 石巻市雄勝歯科診療所³⁾

10 青森県三戸郡歯科医師会の歯科健康保健に対する取り組み（第2報）

○佐藤 綾香 赤穂 和広 松尾 將之 船越 朋輝
松尾 紘吾 稲村 裕之 小村 德行 茂呂 信彦
永野 弘之 山口 登 船越 良一 宮澤 誠

青森県 三戸郡歯科医師会

11 東北大学病院周術期口腔管理センター・予防歯科における診療の動向

○田中 篤史¹⁾ 岩永 賢二郎¹⁾ 玉原 亨¹⁾ 百々 美奈²⁾
飯嶋 若菜²⁾ 猪狩 真奈²⁾ 渡辺 俊吾¹⁾ 加藤 翼¹⁾
丹田 奈緒子²⁾ 小関 健由¹⁾

東北大学大学院歯学研究科 予防歯科学分野¹⁾ 東北大学病院 予防歯科²⁾

12 会津医療圏における口腔機能管理に対する会津中央病院歯科口腔医療センターと会津若松・耶麻歯科医師会との医療連携

○重本 心平¹⁾ 宮島 久¹⁾ 濱田 智弘¹⁾ 遠藤 秀樹²⁾
桑原 英俊²⁾ 筒井 章²⁾ 佐藤 明³⁾ 北見 武広³⁾

会津中央病院 歯科口腔医療センター¹⁾ 会津若松歯科医師会²⁾ 耶麻歯科医師会³⁾

懇親会

11月11日（土）第1日目終了後、午後6時40分から懇親会を開催いたします。
多数の皆様のご参加をお待ちしております。

会 場：**SP VILLASサンパレス福島**（学会会場より徒歩約5分）

福島市上町4番30号 TEL：024-523-3811

1

当科における金属アレルギーパッチテストの実態調査

○高橋 文太郎¹⁾ 菅野 勝也¹⁾ 中島 朋美¹⁾ 御代田 駿¹⁾
濱田 智弘²⁾ 金 秀樹¹⁾ 高田 訓¹⁾ 大野 敬¹⁾

奥羽大学歯学部 口腔外科学講座口腔外科分野¹⁾ 会津中央病院 歯科口腔医療センター²⁾

【はじめに】

歯科では補綴物や矯正装置などにさまざまな金属材料が使用されており、歯科医療と金属は密接な関係にある。また、金属アレルギーは掌蹠膿疱症や扁平苔癬などとの関連が示されており、歯科でのアレルゲン検索は重要である。今回われわれは当科で行っているパッチテストによる金属アレルギー検査について実態調査を行ったので報告する。

【方 法】

2010年1月から2015年12月に当科を受診し、パッチテストを実施した患者を対象に、患者数、性別、年齢、パッチテスト結果について調査した。

【結 果】

実施した患者は40歳、50歳女性に多く、検査期間中の実施患者数は増加傾向にあった。パッチテスト結果はこれまでの報告と同様にNi、Co、Cr、Pdで感作反応が多く認められた。

【考 察】

金属アレルギーパッチテストは、検査の煩雑さや反応出現時の有害事象など問題点はあるものの、アレルゲンを検査できる確実な方法であり、今後も需要が増加すると考える。

—◆MEMO◆—

2

福島県県中地区における口唇口蓋裂患者の実施 —震災前後での比較—

○飯 島 康 基¹⁾ 菅 野 勝 也¹⁾ 高 橋 文太郎¹⁾ 川 原 一 郎¹⁾
渡 辺 敦²⁾ 黒 田 栄 子²⁾ 川 鍋 仁²⁾ 福 井 和 徳²⁾
小 板 橋 勉³⁾ 高 田 訓¹⁾ 大 野 敬¹⁾

奥羽大学歯学部 口腔外科学講座¹⁾

奥羽大学歯学部 成長発育講座 歯科矯正学分野²⁾

寿泉堂総合病院 歯科口腔外科³⁾

【はじめに】

福島県では東日本大震災後、生産年齢人口と年少人口の県外への転出増加による人口減少や医療費補助金の交付開始など口唇口蓋裂治療を取り巻く社会的環境が変化した。今回われわれは、福島県県中地区における東日本大震災前後での口唇口蓋裂患者の推移を調べることを目的に実態調査を行った。

【方 法】

各科を新患として受診した口唇口蓋裂患者を対象とした。期間は2006年1月から2016年12月の11年間、調査内容は患者数、性別、裂型、側性、居住地域とした。震災前の2006年から2010年と、震災後の2011年から2016年の各5年間でそれぞれのデータを比較検討した。

【結 果】

患者数では2013年に減少したが、2014年は二次症例が大きく増加した。発生数や側性、裂型は大きく変化はなかった。居住地域では震災後県北、県南、会津地区からの患者が増加した。

【考 察】

震災に伴う人口推移や居住地域の変化による影響が示唆された。

—◆MEMO◆—

3

岩手スポーツ界における いわてスポーツデンティストの活動

○鈴木卓哉 児玉厚三 岩城大介 南幅真治
青木修治 根反不二生 鈴木俊一 吉田一穂
照井淑之 豊田康夫 小田中健策 佐藤保

一般社団法人 岩手県歯科医師会 岩手県スポーツ歯学協議会運営委員会

【はじめに】

一般社団法人岩手県歯科医師会では、いわて国体における歯科的サポートを目的に岩手県歯科医師会認定の『いわてスポーツデンティスト(通称 ISD)』を養成し、その概要について一昨年の本学会にて報告した。今回は ISD のいわて国体での活動ならびに国体終了後の活動状況について報告する。

【方 法】

ISD 養成講習会を平成26年、27年の2回開催し、延べ86名の ISD を養成し、国体をはじめ各種大会等に対応している。

【結 果】

いわて国体冬季大会では2競技に13名、本大会では5競技に58名の ISD を国体救護所に配置した。また国体終了後においても、第5回東アジア U22ハンドボール選手権への10名の ISD の派遣や強化選手への歯科的サポートを継続的に行っている。

【考 察】

スポーツデンティストの活動の場は、今後ますます広がっていくことと思われる。国体における活動実績と経験をもとにさらに活動を進めていきたいと考えている。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

4

地域歯科医師会による岩手県立中部病院入院患者の口腔内一斉調査 ～H22年度と H28年度の比較～

○高橋 綾¹⁾ 前川 洋¹⁾ 齊藤 英朗¹⁾ 昆 隆一¹⁾
 前田 誠一郎¹⁾ 三浦 康弘¹⁾ 米持 武美¹⁾ 加藤 秀昭¹⁾
 鳥谷 恭右¹⁾ 佐藤 保¹⁾ 遠藤 秀彦²⁾ 曾根 克明²⁾
 北村 道彦³⁾

一般社団法人 岩手県歯科医師会 口腔保健センター事業運営委員会¹⁾

岩手県立中部病院²⁾ 町立西和賀さわうち病院³⁾

【はじめに】

北上、花巻市歯科医師会では NST 連携をはじめ、さまざまな医科歯科連携で岩手県立中部病院のサポートをしている。H22年度と H28年度に入院患者の口腔内状況を把握するため入院患者の口腔内一斉調査を実施し、これまでの連携活動が与えた入院患者の口腔内への影響を比較検討した。

【対象】

県立中部病院に入院中の口腔ケア介助が必要な患者。H22年度45人、H28年度54人。

【結果】

対象者の平均年齢は6年間で4歳上昇したにも関わらず、経口摂取患者は58%から76%に増加した。

義歯の使用状況は、使用している人が31%から50%に増加し、病院に持ってきていない人は40%から23%に減少した。

【結論】

北上、花巻市歯科医師会と岩手県立中部病院の医科歯科連携は、入院患者の口腔内環境を改善し、経口摂取の増加に寄与した。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

5

当科における周術期口腔機能管理対象者の 口腔状態

○山 森 郁 吉 岡 千 穂 北 島 健一朗 飯 野 光 喜

山形大学医学部 歯科口腔・形成外科学講座

【緒 言】

当科における周術期口腔機能管理(周管)料算定患者の口腔内の実態を調査し、今後の課題について検討したので報告する。

【対 象】

平成27年4月から平成28年3月までの間に山形大学医学部附属病院歯科口腔外科に院内紹介された患者の内、周管計画書を作成した288名を対象に、紹介元診療科、対象疾患、口腔内の状況、初診から手術までの期間、処置内容について調査した。

【結 果】

診療元診療科は心臓血管・呼吸器外科が61.8%で、対象疾患は肺癌が64.2%を占めた。初診から手術までの期間は平均10日間、74.0%が手術まで1週間以内の紹介だった。手術対象患者215名の内、観血的処置適応の歯を有した患者は145名で、抜歯等の観血処置は52件実施した。体調や時間的制約のため保存的な対応となったのは93名(64%)だった。

【結 論】

がん治療入院前から、周術期口腔管理のための病診連携が必要である。

—◆MEMO◆—

6

メカブと歯周炎

○大 島 光 宏¹⁾ 山 口 洋 子²⁾

奥羽大学薬学部¹⁾ 日本大学歯学部²⁾

.....

【はじめに】

メカブが生体外歯周炎モデルにおいて歯周炎関連線維芽細胞によるコラーゲンゲル分解を亢進したことから、そのメカニズムを調べた。

【材料および方法】

歯周炎関連線維芽細胞を含む生体外歯周炎モデルに、メカブ抽出物ならびに主成分であるフコイタンを添加し、コラーゲン分解を促進するかどうか調べた。

【結果および考察】

メカブもフコイタンも、歯周炎関連線維芽細胞を含む生体外歯周炎モデルのコラーゲン分解を促進した。フコイタンが線維芽細胞の HGF 産生を促進するという報告 (Fukuta と Nakamura、2008) から HGF をモデルに添加したところ、コラーゲン分解は促進された。そこで、モデルに抗 HGF 中和抗体を添加したところ、コラーゲン分解が顕著に阻害された。

以上の結果から、抗 HGF 中和抗体は新規歯周炎治療薬としての応用が期待された。現在、歯周炎を自然発症したカニクイザルを用いた前臨床試験を計画している。

—◆MEMO◆—

7

当県における75歳歯科健診事業の報告

○山崎 猛男²⁾ 根本 充康¹⁾ 鈴木 宏明¹⁾ 戸田 慎治¹⁾
佐藤 文彦¹⁾ 佐々木 隆二¹⁾ 森 拓也¹⁾ 齋 基之²⁾
相澤 俊彦²⁾ 前川 理人²⁾ 川村 洋²⁾ 河瀬 聡一朗²⁾
細谷 仁憲

一般社団法人 宮城県歯科医師会 地域保健部会¹⁾

一般社団法人 宮城県歯科医師会 在宅歯科部会²⁾

【はじめに】

宮城県歯科医師会では平成22年度より75歳歯科健診事業を宮城県後期高齢者医療広域連合より委託形式で実施した。事業開始から7年間の検証を行ったので報告する。

【対象と方法】

平成22年度～平成28年度の7年間、当該年度内に75歳年齢到達者に対し、簡便な口腔機能評価を含む通院型歯科健診を行った。(東日本大震災のため平成23年度該当者は平成24年度に一括して実施)

【結果および考察】

7年間で延べ19,333人の歯科健診を行った。7年間の総覧すると、現在歯数は平成22年度19本から平成28年度21本と年度ごとに微増し、その他の項目も含め歯科疾患実態調査をほぼ裏付ける結果であった。反復唾液嚥下テストは平均4.8回であり、3回/30秒をカットオフとする嚥下障害疑い者は8%(1,449人)であり、健診後のフォローアップ体制構築が課題である。

【利益相反】

本発表に利益相反事項はない。

—◆MEMO◆—

8

仮設住宅入居者に対する口腔ケア推進事業の 4年間の総括

○瀬川 洋¹⁾ 大橋 明石¹⁾ 板橋 仁²⁾ 高田 訓³⁾
池山 丈二⁴⁾ 金子 振⁴⁾ 海野 仁⁴⁾

奥羽大学歯学部 口腔衛生学講座¹⁾ 奥羽大学歯学部 成長発育歯学講座 歯科矯正学分野²⁾

奥羽大学歯学部 口腔外科学講座³⁾ 公益社団法人 福島県歯科医師会⁴⁾

【はじめに】

福島県内の帰宅困難地域の仮設住宅入居者に対する口腔ケア推進事業を2013年から実施している。今回、これまでの事業の結果について検討したので報告する。

【対象と方法】

2013年～2016年に本事業に同意を得て参加した福島県内の仮設住宅の入居者合計201名を対象に、福島県歯科医師会を実施主体に奥羽大学が協力した。本事業は奥羽大学倫理調査委員会(承認番号第95号)の承認を得て行った。

【結果および考察】

ストレスの経年変化は2013年が 132.8 ± 65.9 kIU/L、2014年が 46.4 ± 29.0 、2015年が 34.5 ± 34.3 、2016年が 48.3 ± 47.8 と減少傾向にある。口腔乾燥度の経年変化は2013年が $26.5 \pm 1.94\%$ 、2014年が 25.5 ± 2.70 、2015年が 28.0 ± 0.68 、2016年が 26.2 ± 2.77 と経年に変化が認められなかった。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—



地域で“食べる”を支えるために ～食べる輪の活動とアンケート調査から多職種 連携を考える～

○山本 寿 則^{1、2)} 河 瀬 聡一朗^{1、3)}

石巻圏摂食・嚥下研究会¹⁾

ことぶき歯科²⁾

石巻市雄勝歯科診療所³⁾

【はじめに】

食べる輪は「地域で“食べる”を支えるために」を理念に石巻圏域の病院・施設に所属する有志で発足し、平成27年3月から活動を開始している。摂食嚥下障害には多職種の関りが必要であるが、多職種がチームに在籍している環境は稀であり、連携も十分とはいえない。今回、多職種連携の強化を目的に、食べる輪の参加者に連携の現状や要望についてアンケート調査を行った。

【方 法】

平成28年11月12日開催の食べる輪で全参加者にアンケート用紙を配布。当日回収し結果をまとめた。

【結果および考察】

参加者は多職種連携の必要性を感じていた。チーム内に歯科領域スタッフが在籍する環境は少ないが、その必要を感じる意見は非常に多かった。特に、義歯や咀嚼、口腔ケアへの知識・技術の教育を必要とする回答が多かった。今後、この結果をもとに、要望の多い内容を積極的に取入れ、摂食嚥下障害に対して多職種で取組めるように連携を強固にしていきたい。

—◆MEMO◆—

青森県三戸郡歯科医師会の歯科健康保健に対する 取り組み（第2報）

○佐藤綾香 赤穂和広 松尾將之 船越朋輝
松尾紘吾 稲村裕之 小村徳行 茂呂信彦
永野弘之 山口登 船越良一 宮澤誠

青森県 三戸郡歯科医師会

【はじめに】

地域の特産品祭りに参画し、口腔検査測定を通して健康意識の向上や口腔機能の重要性を訴えてきた。中高年層の参加が多い点に着目し、咀嚼嚥下機能に関連すると思われる検査項目を加え、集計を行ったので報告する。

【対象および方法】

青森県三戸郡南部町において開催される「ふくち特産品祭り」(平成26～28年度)を訪れた155人を対象に①咬合力測定②舌圧測定③口唇圧測定④口腔乾燥度測定⑤開口量測定の検査を実施し、集計を行った。

【まとめ】

健常者が測定の対象であるため、正常範囲を大きく逸脱する結果ではなかったが、適切な歯科処置や口腔衛生管理の継続により咬合力の低下を防止できると考えられ、高齢期に至る前に口唇閉鎖力や舌運動を促すことで、咀嚼嚥下を含む口腔機能低下の防止に繋がると考えられた。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

東北大学病院周術期口腔管理センター・予防歯科 における診療の動向

○田 中 篤 史¹⁾ 岩 永 賢二郎¹⁾ 玉 原 亨¹⁾ 百 々 美 奈²⁾
 飯 嶋 若 菜²⁾ 猪 狩 真 奈²⁾ 渡 辺 俊 吾¹⁾ 加 藤 翼¹⁾
 丹 田 奈緒子²⁾ 小 関 健 由¹⁾

東北大学大学院歯学研究科 予防歯科学分野¹⁾ 東北大学病院 予防歯科²⁾

【はじめに】

近年、がん治療や心臓血管手術などの周術期における口腔管理の重要性が認識され、平成24年度より周術期口腔機能管理が保険導入された。本報告では東北大学病院周術期口腔管理センターの受診動向を調査した。

【方 法】

平成27～28年度の本センター受診の初診患者を対象とし、初診時の紹介状の内容と周術期口腔管理に関する要望の動向を調査した。

【結果および考察】

平成28年度の紹介数は前年度より1割増加し、紹介元診療科としては、歯科口腔外科、心臓血管外科、移植・再建・内視鏡外科(食道)、耳鼻咽喉・頭頸部外科、血液・免疫科、循環器内科の順で多く、この傾向は変わらなかった。全体では、放射線治療前、化学療法前、ビスホスフォネート製剤・抗ランクル抗体製剤の使用前の紹介が増加していた。

当センターへの患者紹介の動向の変化は、医科による歯科の重要性の認識の高まりによるものと考えられ、医科歯科連携をより強固し、周術期口腔支援を推進する必要がある。

—◆MEMO◆—

会津医療圏における口腔機能管理に対する 会津中央病院歯科口腔医療センターと 会津若松・耶麻歯科医師会との医療連携

○重本心平¹⁾ 宮島久¹⁾ 濱田智弘¹⁾ 遠藤秀樹²⁾
桑原英俊²⁾ 筒井章²⁾ 佐藤明³⁾ 北見武広³⁾

会津中央病院 歯科口腔医療センター¹⁾ 会津若松歯科医師会²⁾ 耶麻歯科医師会³⁾

【はじめに】

当科は口腔外科を中心に、有病者歯科、障がい者歯科などにも取り組んできたが、患者数増加への対応や地域医療圏における連携医療の構築を目的に、平成28年3月、歯科部門、口腔外科部門、口腔機能管理部門の3部門に再編成し、より専門性の高い医療提供に努めている。今回、口腔機能管理部門における取り組みについて、その概要を報告する。

【対象と方法】

平成28年度に当センターで口腔機能管理を行った症例について検討した。

【結 果】

高齢者に対する適切な口腔機能管理は極めて重要で、舌接触補助床などの歯科独特の治療の併用は、より効果的な改善を期待できることが示唆された。

【考 察】

訪問診療を始めとした高齢者医療にとって歯科の介入は必須となってきた。さらに、摂食機能を改善することは歯科医療の特殊性であり、今後、広く普及させる必要性があると考えられる。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

17 パーシャルデンチャー装着時におけるピエゾグラフィーの有効性

○石川 佳和

一般社団法人 青森県歯科医師会 会員

18 要介護高齢者の食事形態低下に関する要因の検討

○鈴木 史彦 北條 健太郎 山家 尚仁 瀬川 洋

奥羽大学歯学部附属病院 地域医療支援歯科

IV 群

10:05~ 11:05

座長 秋田県歯科医師会理事 小川 欽也

19 当院での液状化検体細胞診（LBC）症例の検討 一般歯科医の口腔がんの早期発見に果たす役割

○佐々木 優

医療法人優和会 おひさまにこにこ歯科医院

20 当科における角化嚢胞性歯原性腫瘍（KCOT）、正角化性歯原性嚢胞（OOC）の臨床的検討

○北 島 健一朗 石川 恵生 山 森 郁 遊 佐 和 之
橋 寛彦 飯 野 光 喜

山形大学医学部 歯科口腔・形成外科学講座

21 開業医と病院歯科口腔外科との病診連携にて良好な結果が得られた 上顎洞内異物の一例

○大 淵 真 彦¹⁾ 長 橋 泰 次²⁾ 福 地 峰 世¹⁾ 福 田 雅 幸³⁾

秋田労災病院 歯科口腔外科¹⁾ ながはしデンタルクリニック²⁾

秋田大学医学部附属病院 歯科口腔外科³⁾

22 当科で経験した骨吸収抑制薬関連顎骨壊死の臨床的検討

○畠山 成知¹⁾ 福田 雅幸²⁾ 高野 裕史²⁾ 中田 憲²⁾
山崎 雅人²⁾ 今野 泰典²⁾ 五十嵐 秀光²⁾

能代山本医師会病院 歯科口腔外科¹⁾ 秋田大学医学部附属病院 歯科口腔外科²⁾

23 診断に苦慮した SAPHO 症候群の1例

○小野 愛実 柳 沼 貞之進 中山 実佳 北 畠 健裕
山崎 森里生 遠 藤 学 金子 哲治 工 藤 聖美
佐久間 知子 長谷川 博

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

24 ビタミンK欠乏性血液凝固異常を呈した重症歯性感染症の1例

○本間 英明¹⁾ 小野 愛実²⁾ 中山 実佳²⁾ 北 畠 健裕²⁾
山崎 森里生²⁾ 金子 哲治²⁾ 門 馬 勉¹⁾ 長谷川 博²⁾

大原総合病院 歯科口腔外科¹⁾ 福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科²⁾

V 群

11:10 ~ 12:00

座長 青森県歯科医師会理事 伊 藤 真

25 骨格性下顎前突症患者に対し顎離断術前後に睡眠検査を行った 1症例

○細谷 尚史 川 鍋 仁 福 井 和 徳

奥羽大学歯学部 成長発育歯学講座 歯科矯正学分野

26 当科における10年間の顎顔面骨骨折症例に対する臨床的検討

○石田 昂 高野 裕史 中田 憲 今野 泰典
五十嵐 秀光 福地 峰世 下田 悟士 山崎 雅人
福田 雅幸

秋田大学医学部附属病院 歯科口腔外科

27 当科における過去10年間の顎矯正手術症例に関する検討

○高野 裕史 中田 憲 今野 泰典 五十嵐 秀光
福地 峰世 石田 昂 下田 悟士 山崎 雅人
福田 雅幸

秋田大学医学部附属病院 歯科口腔外科

28 FRIOS® BoneShield を用いた GBR 法の治療成績

○中山 実佳 柳 沼 貞之進 小野 愛実 北 畠 健裕
山崎 森里生 遠 藤 学 金子 哲治 工 藤 聖美
佐久間 知子 長谷川 博

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

29 当科における下顎骨関節突起骨折の臨床的検討

○柳 沼 貞之進 小野 愛実 中山 実佳 北 畠 健裕
山崎 森里生 遠 藤 学 金子 哲治 工 藤 聖美
佐久間 知子 長谷川 博

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

VI 群

12:05 ~ 13:05

座長 福島県歯科医師会理事 中村 文彦

30 コンポジットレジンによる直接修復の臨床報告

○山田 満憲¹⁾ 山田 聡²⁾

オーラルステーションデンタルクリニック¹⁾ いわき南歯科クリニック²⁾

31 インプラントにおける事故 フィクスチャー破折について

○岡田 諭 遠藤 義隆 佐々木 徹 内藤 秀明
飯久保 美穂 海野 仁 大桶 志延 沼崎 浩之
山口 晴彦 齋藤 博安 吉田 晃 菅井 秀樹
土屋 令雄 佐久間 宗臣

福島口腔外科ゼミナール

32 ジルコニアアバットメントの破折を生じたインプラント補綴症例

○雨宮 幹樹¹⁾ 関根 秀志¹⁾ 金 秀樹²⁾ 高田 訓²⁾

奥羽大学歯学部 歯科補綴学講座¹⁾ 奥羽大学歯学部 口腔外科学講座²⁾

33 学校歯科健診と「米沢方式」による精密検査の比較

○熊野 裕仁¹⁾ 平 幸雄¹⁾ 山田 雄大¹⁾ 笹生 一嘉¹⁾
安藤 栄吾¹⁾ 松岡 勲¹⁾ 中川 隆伸¹⁾ 大峽 潤¹⁾
渡部 宏一¹⁾ 村山 敏明¹⁾ 遠藤 浩¹⁾ 鈴木 基¹⁾
結城 昌子²⁾ 廣瀬 公治²⁾

一般社団法人 米沢市歯科医師会¹⁾ 奥羽大学歯学部 口腔衛生学講座²⁾

34 奥羽大学歯学部附属病院における誤飲・誤嚥事故防止対策の経過

○佐々木 重夫 成田 知史 保田 穂 瀬川 洋
杉田 俊博

奥羽大学歯学部附属病院 地域医療支援歯科

35 メラニン色素沈着をレーザーにより除去した1例

○佐藤 穂子¹⁾ 車田 文雄²⁾ 木村 裕一¹⁾

奥羽大学歯学部 歯科保存学講座 歯内療法学分野¹⁾ 奥羽大学歯学部 口腔衛生学講座²⁾



低出力レーザーおよびカテキン溶液による E faecalis に対する殺菌効果への検討

○山 田 嘉 重¹⁾ 木 村 裕 一²⁾ 菊 井 徹 哉¹⁾

奥羽大学歯学部 歯科保存学講座 保存修復学分野¹⁾

奥羽大学歯学部 歯科保存学講座 歯内療法学分野²⁾

【はじめに】

根管治療の予後の成否には根管洗浄が重要な役割を担っている。現在、最も効果的な殺菌作用を有する根管洗浄液として、次亜塩素酸ナトリウム洗浄液が広く根管治療に使用されている。しかし、強い殺菌作用を示す反面、根尖周囲組織の障害を誘発する危険性も有している。そのため、生体組織に安全な新たな根管殺菌方法を検討した。

【実験方法】

本研究では難治性根尖性歯周炎の原因菌と考えられている E faecalis に対して、低出力の半導体レーザーを使用した光殺菌療法および本研究用に試作したカテキン配合洗浄液を使用した殺菌方法を施行した。

【結果および考察】

低出力レーザーを使用した光殺菌療法では、5分間の照射で E faecalis の殺菌が確認された。一方、カテキン配合洗浄液は20%以上のカテキン濃度において10分間作用させることで殺菌が確認された。今回施行した両方法は、E faecalis に対して殺菌効果を有することが確認された。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

常温重合レジンの操作条件が機械的性質に及ぼす影響について

○大 木 達 也 齋 藤 龍 一 石 田 喜 紀 岡 田 英 俊

奥羽大学歯学部 生体材料学講座 歯科理工学分野

【はじめに】

臨床の場で、支台歯形成後に暫間的に使用されるテンポラリークラウンであるが、ある程度成形した後に温水中で保管を行い、重合反応を促進させることがよく行われる。しかし、その手技は術者により異なることが多い。そこで、その材料である常温重合レジンについて、各種操作が機械的性質に及ぼす影響について検討した。

【材料および方法】

4種の常温重合レジンを使用し、試料製作時に各設定温度(37℃、50℃、70℃、90℃)および時間(1分、2分)で保管を行った。その後、曲げ試験を行い、曲げ強さと弾性係数を算出した。

【結果および考察】

試料を保管した温水の温度が高いほど、曲げ強さと弾性係数は大きな値を示した。高温水中(70℃、90℃)で保管した際に特に物性が向上した理由は、重合開始剤(BPO)の活性化温度が60℃以上であり、重合度が向上したためであると考えられた。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—



過去10年間における山形県歯科医師会主催 学術研修会の検討

○高橋 晃治¹⁾ 大類 晋¹⁾ 富樫 正樹¹⁾ 青木 真一¹⁾
齋藤 裕太¹⁾ 大峽 潤¹⁾ 黒江 敏史¹⁾ 鈴木 基²⁾

一般社団法人 山形県歯科医師会 学術常任委員会¹⁾

一般社団法人 山形県歯科医師会 会員²⁾

【目 的】

山形県歯科医師会学術常任委員会が企画・運営した過去の研修会について調査、検討し、今後の研修会開催に役立てる。

【対 象】

2007年～2016年に開催した合計43回の研修会を対象とした。これらにおいて、開催時期、日程、開催曜日が研修会参加者数に与える影響を検討した。

【結 果】

統計学的には、開催曜日(木、土、日曜・祝日)に有意差がみられた。次に、曜日ごとに検定を行なったところ、土曜日の参加者数が木曜と日曜・祝日の参加者数に対し有為に少ないことが判明した。なお、木曜と日曜・祝日の間に有意差はみられなかった。

【考 察】

研修会のテーマは研修会企画において重要であるが、それ以外に開催曜日が研修会の参加に影響を与えることが示された。今後も研修会データの解析を進め、会員にとって有益な研修会が開催できるよう努めたい。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

病変を伴う根未完成歯に生活歯髄保存療法を試みた1例

○上 松 文 裕

青森県上十三歯科医師会

【はじめに】

中心結節とは、歯の形態異常、異常結節の一つであり、咬合面中央部に出現し、円錐状や棒状の小突起として認められる。結節内に歯髄が入り込んでいる場合において、破折により露髄し、歯髄炎や根尖性歯周炎を引き起こすことがある。好発は下顎第二小臼歯であると言われている。

根未完成歯の治療は、生活歯の場合はアペキシゲネシス、失活歯の場合はアペキシフィケーションに分けられて考えられてきた。この度結節の破折にて病変を認めた患歯にアペキシゲネシスを実施したので報告する。

【対象と方法】

当クリニック受診した11歳男児の左下5番に上記疾患を認めたため生活歯髄保存療法を実施した。その後経過を観察した。

【結果および考察】

術後、臨床症状もなく、歯髄診査及びX線診査において異常は認められず良好な予後を認めた。

【利益相反】

本報告について利益相反はない。

—◆MEMO◆—

17

パーシャルデンチャー装着時における ピエゾグラフィーの有効性

○石川 佳和

一般社団法人 青森県歯科医師会 会員

【はじめに】

部分床義歯装着者でピエゾグラフィーの有効性を調べた。

【対象と方法】

被験者は、当医院の患者30名である。下顎両側臼歯部欠損遊離端義歯を対象に、同一患者で通法と、ピエゾグラフィーで制作し、装着感をVASで比較した。レプリカを製作し、切断面の厚みを測定比較した。

【結果および考察】

ピエゾグラフィーを用いて制作した部分床義歯の方が通法で制作したものより心地良く、VAS値も高かった。切断チップの厚みは、ピエゾグラフィーを用いて制作した義歯の方が平均右頬側1mm、左頬側1.5mm、右舌側0.7mm、左舌側0.9mm厚かった。この厚みが、頬舌のフィット感を増し、心地良く感じたものと思われる。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

○鈴木 史彦 北條 健太郎 山家 尚仁 瀬川 洋

奥羽大学歯学部附属病院 地域医療支援歯科

.....

【はじめに】

嚥下内視鏡検査(VE)を実施した要介護高齢者において、食事形態の低下となる要因を retrospective に検討したので報告する。

【対象と方法】

平成26年4月～平成29年3月にVEを実施した121名(平均年齢86.1歳)を対象とした。VE結果から食事形態の維持・向上群(65名)と低下群(56名)に分類した。調査項目は年齢、性別、要介護の原因疾患、要介護度、認知症高齢者の日常生活自立度、経管栄養の有無、歯や義歯の有無、VE所見、VE実施前の食事形態、VE実施前の水分のトロミ、嚥下訓練の有無、指示理解の有無とした。分析は匿名化し、倫理的に配慮した。

【結果および考察】

ロジスティック回帰分析から、食事形態低下のオッズ比は指示理解の有無が8.8、顎堤粘膜での咀嚼が3.2、脳血管疾患と認知症の併発が2.5であった。指示理解が困難だと口腔機能の向上も困難となり、代償的に食事形態が低下となる可能性が高いことが示された。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

当院での液状化検体細胞診（LBC）症例の検討 一般歯科医の口腔がんの早期発見に果たす役割

○佐々木 優

医療法人優和会 おひさまにこにこ歯科医院

【結 言】

本邦の口腔がんによる死亡者数の増加にはいまだ歯止めがかかっておらず、早期発見に関する一般歯科医の役割の重要性が増している。

【方 法】

当院での液状化検体細胞診(LBC)症例を解析し、一般歯科医で行う際の利点と問題点を検討した。細胞採取には歯間ブラシまたは口腔専用オーセレックスブラシを使用し、細胞保存液にはLBC Prep(武藤化学)またはSure Path(BD社)を用いた。

【結 果】

2013年3月から2017年6月までにLBCを行った症例は45例(男性21例、女性24例)。細胞診断はclass II 40例、class III 1例、class V(扁平上皮癌) 2例。不適正検体2例で、いずれも歯間ブラシで検体を採取した臨床診断が白板症の症例だった。

【考 察】

口腔がんが増加に転じた北米では、改めて一般歯科医による口腔がんの早期発見の重要性が指摘され、従来のブラシ細胞診に加えて、LBCが普及しつつある。本邦でも一般歯科医でのLBCの普及が必要と考えられた。

—◆MEMO◆—

当科における角化嚢胞性歯原性腫瘍 (KCOT)、 正角化性歯原性嚢胞 (OOC) の臨床的検討

○北 島 健一朗 石 川 恵 生 山 森 郁 遊 佐 和 之
橘 寛 彦 飯 野 光 喜

山形大学医学部 歯科口腔・形成外科学講座

【結 言】

1992年の WHO 分類で歯原性角化嚢胞は錯角化型と正角化型に分類されていたが、2005年に錯角化型は高い再発率・悪性化などから角化嚢胞性歯原性腫瘍 (KCOT) と分類され、2012年には正角化型は正角化性歯原性嚢胞 (OOC) として記載された。どちらも臨床・画像所見は類似しているが、術後再発については KCOT が高率である。今回、当科で加療した KCOT、OOC の臨床的検討を行った。

【対 象】

過去5年間に KCOT、OOC と確定診断された症例で性別・年齢・発生部位・治療法について検討した。

【結 果】

総数は17例で、KCOT 15例・OOC 2例、男性10例・女性7例、平均年齢58歳、部位は上顎4例・下顎13例、治療後の再発症例は KCOT の4例であった。

【考 察】

KCOT、OOC の臨床像は類似しているが術後再発に差異があるため、KCOT では長期的な経過観察が必要である。

—◆MEMO◆—

開業医と病院歯科口腔外科との病診連携にて 良好な結果が得られた上顎洞内異物の一例

○大 淵 真 彦¹⁾ 長 橋 泰 次²⁾ 福 地 峰 世¹⁾ 福 田 雅 幸³⁾

秋田労災病院 歯科口腔外科¹⁾ ながはしデンタルクリニック²⁾

秋田大学医学部附属病院 歯科口腔外科³⁾

【緒 言】

上顎洞内異物に対する治療は難渋する場合がある。今回、上顎洞内への異物迷入した原因歯に対して紹介医と連携し、良好な結果が得られた一例を経験したので報告する。

【症 例】

39歳女性、既往歴なし。現病歴は右側頬部の腫脹、疼痛を主訴に近歯科を受診した。右側上顎第一大臼歯に根尖病変と根尖外にX線不透過像を認め、精査依頼にて当科紹介となった。

【経 過】

CT 写真にて異物が上顎洞内に溢出しており、紹介医との方針検討の結果、紹介医での根管治療後に当科にて全身麻酔下に異物除去術を施行した。異物は約3mm のファイルであった。術後1年経過するが症状の再燃無く経過良好である。根尖部から溢出した異物は急性症状を来たした場合は当該歯が予後不良となり抜歯、異物除去が必要となる。本症例では開業医と病院歯科口腔外科が密な連携を行うことで良好な結果が得られその重要性が示された。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

当科で経験した骨吸収抑制薬関連顎骨壊死の臨床的検討

○ 嶋 山 成 知¹⁾ 福 田 雅 幸²⁾ 高 野 裕 史²⁾ 中 田 憲²⁾
山 崎 雅 人²⁾ 今 野 泰 典²⁾ 五十嵐 秀 光²⁾

能代山本医師会病院 歯科口腔外科¹⁾

秋田大学医学部附属病院 歯科口腔外科²⁾

【はじめに】

骨吸収抑制薬関連顎骨壊死の臨床的検討を行ったのでその概要を報告する。

【方 法】

2014年6月から2017年6月に当科を受診した骨吸収抑制薬関連顎骨壊死症例の13例を対象とし、年齢・性別、発症部位、ステージ、薬剤投与経路、原疾患、発症の原因、治療法・成績について検討した。

【結 果】

男性2例、女性11例、平均年齢73.8歳、発症部位は上顎4例、下顎8例、上下顎1例、ステージ2が10例、ステージ3が3例、薬剤投与経路は経口群54%、注射群38%、経口＋注射群が8%、原疾患は経口群で骨粗鬆症が86%、注射群で乳癌骨転移が40%、発症の原因は抜歯後発症が46%、歯槽部炎症が54%、治療成績は外科的切除で治癒が89%、保存療法で改善以上が75%であった。

【考 察】

保存療法で改善がない場合は患者と相談し外科的治療に移行する時期を決定するべきであると思われた。

—◆MEMO◆—

○小野愛実 柳沼貞之進 中山実佳 北嶋健裕
山崎森里生 遠藤学 金子哲治 工藤聖美
佐久間知子 長谷川博

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

【はじめに】

SAPHO 症候群 (Synovitis - Acne - Pustulosis - Hyperostosis - Osteitis: 滑膜炎 - ざ瘡 - 膿疱症 - 骨過形成 - 骨炎) とは、原因不明の全身疾患である。当科で経験した SAPHO 症候群の1例を報告する。

【症例及び経過】

23歳女性。現病歴:平成27年8月、右側咬筋部の腫脹、疼痛を自覚した。近医を受診し生検の結果、咬筋部アミロイドーシスの疑いで当院内科へ紹介され、さらに同年12月、顎骨病変の精査目的で当科へ紹介となった。臨床的に硬化性骨髄炎と診断し、抗生剤投与下で経過観察中、掌蹠膿疱症が発症した。皮膚科対診により SAPHO 症候群と診断を得て、現在経過観察中である。

【結 語】

難治性の硬化性骨髄炎を経験した際には SAPHO 症候群の可能性を念頭に置く必要がある。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

ビタミンK欠乏性血液凝固異常を呈した重症菌性感染症の1例

○本 間 英 明¹⁾ 小 野 愛 実²⁾ 中 山 実 佳²⁾ 北 島 健 裕²⁾
山 崎 森里生²⁾ 金 子 哲 治²⁾ 門 馬 勉¹⁾ 長谷川 博²⁾

大原綜合病院 歯科口腔外科¹⁾ 福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科²⁾

【諸 言】

ビタミンK欠乏症は比較的まれであり、肝・胆道疾患など複数の原因が関与することが知られている。今回われわれは、低栄養状態の重症菌性感染症患者に対し、セフェム系抗菌薬投与に起因したと考えられるビタミンK欠乏性血液凝固異常を認めた1例を経験したのでその概要を報告する。

【症例および経過】

患者は79歳女性、右側頬部の腫脹、開口障害、経口摂取困難を主訴に当科紹介となった。CT画像上、右側咬筋周囲および側頭筋から側頭下窩にかけて膿瘍形成を認め、即日入院下にドレナージおよび抗菌薬投与を開始した。第3病日目から消炎傾向を認めたが、第4病日目に血液凝固系の異常亢進を認めた。DIC関連検査で異常がないことから、ビタミンK製剤を投与し抗菌薬を変更したところ改善を認め、以降経過良好であった。

【結 語】

長期経口摂取不良の菌性感染症患者に対し、セフェム系抗菌薬を使用する際には注意が必要であると考えられた。

【利益相反】

本症例に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

骨格性下顎前突症患者に対し顎離断術前後に睡眠検査を行った1症例

○細谷尚史 川鍋 仁 福井和徳

奥羽大学歯学部 成長発育歯学講座 歯科矯正学分野

【緒 言】

上下顎の顎離断を伴う外科的矯正歯科治療は、顎顔面の不調和を改善するために行われるが、一方で下顎骨の後方移動による上気道の前後的狭窄により睡眠時呼吸障害が発現するとの報告が見られる。この度、上顎骨の前方移動および下顎骨の後方移動を行った患者に対し、簡易睡眠検査装置による経過観察を行ったため報告する。

【症 例】

20歳男性、オトガイ部の突出感を主訴として来院した。術前矯正治療後、上顎骨の3mm前方移動、下顎骨の10mm後方移動のための骨離断術を行った。顎離断術施行前に終夜睡眠検査を実施し、術後は簡易睡眠検査装置による検査を行い睡眠状態の経過観察を行ったところ、術後7日目では無呼吸・低呼吸数の増加が見られたが、その後、減少が見られた。

【考 察】

顎骨の移動を行った患者では、術直後は炎症や前後的な気道狭窄により一時的な睡眠時の呼吸状態の悪化が見られるが、その後は改善することが示唆された。

—◆MEMO◆—



当科における10年間の顎顔面骨骨折症例に対する臨床的検討

○石田 昂 高野 裕史 中田 憲 今野 泰典
五十嵐 秀光 福地 峰世 下田 悟士 山崎 雅人
福田 雅幸

秋田大学医学部附属病院 歯科口腔外科

【はじめに】

当科における顎顔面骨骨折の現状を把握するため、過去10年間の症例について臨床的検討を行った。

【方 法】

2007年から2016年までに顎顔面骨骨折の診断で手術による治療を行った94例を対象とし、性別、年齢、受傷部位、受傷原因、来院までの日数、術後合併症について調査した。

【結果および考察】

性別は男性77例、女性17例、初診時平均年齢は37.7歳であり、年齢別では10代が多かった。受傷部位は、オトガイ部が51例と最も多く、次いで関節突起が40例、顔面多発骨折が10例であった。受傷原因は、転倒が26例と最も多く、次いで交通事故が25例、スポーツ外傷が22例であった。来院までの日数は、翌日来院が28例と最も多く、術後合併症は感染とプレート破折がそれぞれ1例であった。オトガイ部と関節突起の骨折が多かったのは、受傷原因で転倒が多かったためと思われた。

—◆MEMO◆—



当科における過去10年間の顎矯正手術症例に関する検討

○高野裕史 中田 憲 今野泰典 五十嵐秀光
福地峰世 石田 昂 下田悟士 山崎雅人
福田雅幸

秋田大学医学部附属病院 歯科口腔外科

【はじめに】

当科における顎矯正手術症例の実態を把握するために、過去の10年間の症例について臨床的検討を行った。

【方 法】

2007年から2016年までに当科において顎変形症の診断で顎矯正手術を行った155例を対象とし、年度別症例数、性別症例数、初診時主訴、手術時年齢別症例数、臨床診断別症例数、術式別症例数について調査した。

【結果および考察】

年度別症例数では最近2年間で増加傾向にあった。性別は男性45例、女性110例で男女比率は1:2.44であった。初診時主訴は、不正咬合と審美障害が大半を占め、手術時平均年齢は24.6歳であった。年齢別では20歳代が最も多く、臨床診断別症例数は下顎前突症が最も多かった。術式ではLe Fort I型骨切り術と下顎枝矢状分割術の割合が年々増加しており、術後の安定性が良好で、下顎の後方移動量減少を図れるため、上下顎移動術を選択する症例が増えたためと思われた。

—◆MEMO◆—



FRIOS®BoneShield を用いた GBR 法の 治療成績

○中山実佳 柳沼貞之進 小野愛実 北島健裕
山崎森里生 遠藤学 金子哲治 工藤聖美
佐久間知子 長谷川博

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

【はじめに】

GBR 法は有用な増骨法の1つである。今回われわれは非吸収性メンブレン FRIOS®Bone Shield (FBS)を用いた GBR 法の治療成績を報告する。

【方 法】

2012年から2016年までの5年間に当科でFBSを用いたGBR法を行った27名(男性14名、女性13名、30部位、平均年齢:53歳)を対象とした。検討項目は、部位、術式、自家骨あるいは骨補填剤の使用の有無、メンブレンの露出の有無、インプラント埋入の可否などについて検討した。

【結果と考察】

30部位のうちメンブレン露出を認めたのは8部位(27%)であったが、インプラント体の埋入が不可能であったのは1部位のみであった。非露出例においては全例で埋入が可能であった。純チタン製の非吸収性メンブレンは露出する可能性があるものの有用性は高いと考えられた。

【利益相反】

開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

○柳 沼 貞之進 小 野 愛 実 中 山 実 佳 北 嶋 健 裕
山 崎 森里生 遠 藤 学 金 子 哲 治 工 藤 聖 美
佐久間 知 子 長谷川 博

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

【緒 言】

下顎骨関節突起骨折は下顎骨骨折の好発部位の1つであり、治療法の選択にしばしば苦慮する。そこで、今回当科で治療を行った関節突起骨折について検討したので報告する。

【対 象】

2004年3月から2017年3月までに当科を受診し、検討可能な下顎骨関節突起骨折46例を対象とした。

【結果および考察】

男性が26例(33部位)、女性が20例(23部位)、年齢は6～98歳で、平均50.9歳であった。病態は、関節突起上頸部での骨折と骨片の前下内方転位が多かった。観血的治療は9例(いずれも下頸部か基底部)で、術後合併症はなかった。顎間固定期間は、保存的治療群では平均28.9日、観血的治療群は平均20日であった。中富の分類による予後判定は、観血的治療群は完全治癒67%、障害Ⅰ33%、保存的治療群は完全治癒51%、障害Ⅰ41%、障害Ⅱ8%であった。

本疾患の治療法の選択は検討を要するが、手術部位によっては高い完全治癒が望める可能性が示唆された。

【利益相反】

利益相反はなし。

—◆MEMO◆—

○山田 満憲¹⁾ 山田 聡²⁾

オーラルステーションデンタルクリニック¹⁾ いわき南歯科クリニック²⁾

【はじめに】

ミニマルインターベンション(以下、MI)の普及およびコンポジットレジン(以下、CR)の材料学的性質の向上は、従来の間接修復の適応からフリーエナメルを残した直接修復を可能とした。そこで今回 MI に基づいた CR による直接修復の症例について報告する。

【対象と方法】

臼歯部隣接面における接触関係が維持されている症例を対象とした。対象者にはヘルシンキ宣言に基づく主旨説明を含むインフォームドコンセントの後、MI に基づいた CR による直接修復を行った。

【結果および考察】

MI に基づいた CR による直接修復は、患者負担の軽減および機能性と審美性を兼ね備えた解剖学的形態の回復が出来た。また先端が湾曲加工された充填器の使用は、フリーエナメルを残した複雑な MI 窩洞に対しアプローチが容易になることが考えられ、流動性の高い材料を緊密に充填できることが示唆された。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

31

インプラントにおける事故 フィクスチャー破折について

○岡田 諭 遠藤 義隆 佐々木 徹 内藤 秀明
飯久保 美穂 海野 仁 大桶 志延 沼崎 浩之
山口 晴彦 齋藤 博安 吉田 晃 菅井 秀樹
土屋 令雄 佐久間 宗臣

福島口腔外科ゼミナール

【背景】

修復後のインプラント破折は、発生頻度は低いながらも最も深刻な合併症の一つである。破折したインプラント体の除去は、インプラント体の周囲の骨ごと一塊として除去するため患者に与える損傷と苦痛が大きいのが問題点である。

【症例および経過】

1例目の症例は58歳男性、平成24年12月に右下6部にインプラント埋入、平成27年12月フィクスチャー本体の破折。破折したフィクスチャー本体を除去し、右下6、7部にインプラント体を埋入した。

2例目の症例は54歳男性、平成24年3月に右下56部にインプラント2本埋入。平成27年10月19日右下6のフィクスチャーが破折。平成28年1月14日に破折したフィクスチャーの後方に1本埋入した。

【考察】

インプラントの破折は重篤な合併症であり、しばしば破折したインプラントの撤去が必要となる。必要なリコールやフォローアップも含めて、エビデンスに基づく治療法と材料選択に従い対応すべきである。

—◆MEMO◆—



ジルコニアアバットメントの破折を生じた インプラント補綴症例

○雨宮幹樹¹⁾ 関根秀志¹⁾ 金秀樹²⁾ 高田訓²⁾

奥羽大学歯学部 歯科補綴学講座¹⁾ 奥羽大学歯学部 口腔外科学講座²⁾

【はじめに】

審美性が重視される部位に対して、ジルコニア素材コンポーネントが臨床応用されている。このたび、上顎前歯部に適用したジルコニア製アバットメントに破折を生じたインプラント治療症例を報告する。

【症例】

36歳の男性。上顎両側中切歯欠損にインプラント治療にて機能回復することとした。2014年1月、2本のインプラント体を埋入し、2015年5月、ジルコニア製アバットメントとセメント固定式上部構造を装着した。

【治療経過】

同年6月、右側中切歯部に適用されたアバットメントのアバットメントスクリューに緩みを生じ、左側中切歯部に適用されたアバットメントの基部に破損を生じた。

【考察】

解剖学的条件からインプラント体埋入方向は唇側傾斜が強く、継続的な側方荷重によりアバットメント基部に大きな剪断力が加わっていたことが推測された。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

33

学校歯科健診と「米沢方式」による精密検査の比較

○熊野裕仁¹⁾ 平幸雄¹⁾ 山田雄大¹⁾ 笹生一嘉¹⁾
安藤栄吾¹⁾ 松岡勲¹⁾ 中川隆伸¹⁾ 大峽潤¹⁾
渡部宏一¹⁾ 村山敏明¹⁾ 遠藤浩¹⁾ 鈴木基¹⁾
結城昌子²⁾ 廣瀬公治²⁾

一般社団法人 米沢市歯科医師会¹⁾ 奥羽大学歯学部 口腔衛生学講座²⁾

【はじめに】

平成7年度から、米沢市では小・中学生に学校歯科健診(学校健診)で CO・GO 保有者に「歯科受診のすすめ」を配布し、歯科診療所での精密検査(精査)受診の勧奨を行っている。そこで、学校健診と診療所での精査のう蝕を、年度推移で比較したので報告する。

【対象および方法】

調査対象は、米沢市の小・中学校で健診を受診した児童・生徒および、各年度の6月1ヵ月間に歯科診療所へ「歯科受診のすすめ」を持参し、精査を受診した者とした。学校健診と精査のう蝕は、DMFT 指数で表し平成7～27年度で比較した。

【結果および考察】

中学1年生(12歳)の学校健診による DMFT 指数は、4.4(平成7年度)～0.89歯(平成27年度)に減少、逆に一人平均 CO 数では0.55～1.15歯と増加を示した。一方、診療所での精査による DMFT 指数、一人平均 CO 数の年度推移でも同様の傾向を示した。

—◆MEMO◆—



奥羽大学歯学部附属病院における誤飲・誤嚥事故防止対策の経過

○佐々木 重 夫 成 田 知 史 保 田 穰 瀬 川 洋
杉 田 俊 博

奥羽大学歯学部附属病院 地域医療支援歯科

【はじめに】

奥羽大学歯学部附属病院において鑄造物合着時の誤飲事故が散見されたため、病院全体で行った防止策を第69回本会で報告した。

今回はその後の経過について報告する。

【方法】

鑄造物のループ付与によってその後の合着時の誤飲事故は起っていない。しかし、この間に鑄造物合着時とは別の新たな誤飲事故が発生した。当院に医科外来はあるものの誤飲・誤嚥物の摘出は困難な環境にあるため郡山市内の総合病院への搬送が余儀なくされる。そのため、新たに誤飲・誤嚥事故発生時のフローチャートと患者容態急変時の緊急招集に関するガイドラインを構築した。

【結果および考察】

誤飲・誤嚥事故の防止には種々な対策と心構えが必要であると思われ、院内の研修会で啓発に努めるとともに緊急招集の試験運用を行った。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

○佐藤 穂子¹⁾ 車田 文雄²⁾ 木村 裕一¹⁾

奥羽大学歯学部 歯科保存学講座 歯内療法学分野¹⁾ 奥羽大学歯学部 口腔衛生学講座²⁾

【はじめに】

近年では審美性を重視した歯科治療を目的に歯科医院を来院する患者が増加している。今回、われわれはEr:YAGレーザーを用いて歯肉メラニン色素沈着を除去した1例を経験したので報告する。

【症例】

患者は42歳の女性。上顎左右側第二小臼歯間唇側側歯肉および下顎左右側犬歯間唇側歯肉の重度メラニン色素沈着を主訴に、奥羽大学歯学部附属病院総合歯科を受診した。

【処置および経過】

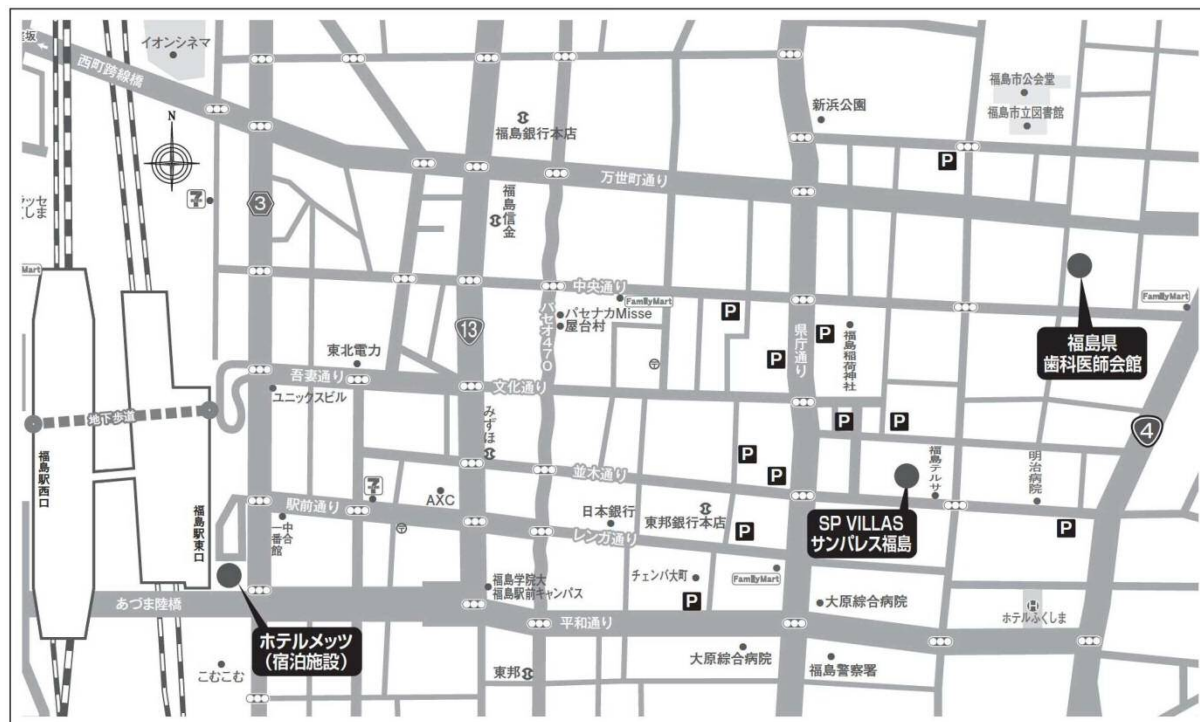
Er:YAGレーザー(アドヴェール Evo モリタ)を用い、出力20pps、40mJ、注水下、チップC800Fを使用し局所麻酔下にて除去を行った。着色が歯肉深部にまで及んでいる部分はややチップをたて、歯肉が薄く着色が薄い部分は角度をつけて歯肉を削り取るように除去した。患者は喫煙の習慣があり、着色も強い症例なので慎重に経過観察を行う予定である。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反はない。

—◆MEMO◆—

学会会場 福島県歯科医師会館案内図



◆交通機関ご案内

- JR 福島駅東口より徒歩約15分
- タクシー／JR 福島駅東口より約5分

※会場の駐車場は限りがありますので、満車の場合はお近くの有料駐車場をご利用ください。

◆懇親会会場 SP VILLAS サンパレス福島

11月11日（土）第1日目終了後、懇親会を開催いたします。

※多数の皆様のご参加をお待ちいたしております。

日 時：平成29年11月11日（土）午後6時40分

場 所：SP VILLAS サンパレス福島（学会会場より徒歩約5分）

福島市上町4番30号 TEL：024-523-3811

2017
第70回東北地区歯科医学会
プログラム

平成29年9月30日発行

東北地区歯科医師会連合会

当番県 福島県歯科医師会

会長 海野 仁

〒960-8105 福島市仲間町6番6号

TEL 024-523-3266
